

令和7年12月25日

令和7年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）参加報告書

大阪大学附属図書館

山本侑子

令和7年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、日本資料専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists. 以下「EAJRS」）の第35回年次大会での発表および、ルクセンブルク大公国での機関訪問調査を行った。以下の通り概要を報告する。

1. 出張者

山本 侑子（大阪大学附属図書館）

児玉 恭祐（京都大学附属図書館）

久我 彩乃（神戸大学附属図書館）

2. 派遣期間

令和7年9月8日（月）～令和7年9月17日（水）

3. 訪問先及び担当者

- Institut für Japanologie, Universität Heidelberg ハイデルベルク大学日本学研究所
- Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History (C²DH) / Christoph Brüll (Assist. Prof) ルクセンブルク大学現代史・デジタル歴史センター
- Bibliothèque nationale du Luxembourg / Ralph Marschall (Service collections numériques) , Vera Seitz (Relations publiques) ルクセンブルク国立図書館

4. 目的

京都大学・大阪大学・神戸大学の3館はいずれも、所蔵する貴重資料等の電子化画像を公開するデジタルアーカイブを整備しており、コンテンツの充実化を進めている。公開したコンテンツの利活用に着目すると、書籍やテレビ番組での転載・放映などの利用は活発に行われているが、研究活動における利活用は発展途上の状況である。

デジタルアーカイブを単に資料画像を公開する場から、学内外の研究活動により積極的に寄与し、あらたな価値を創出するリソースを発信するプラットフォームへと進化させるためにはどのような取り組みが効果的か、という課題意識のもと、コンテンツの利活用を促進する機能開発、研究者と連携して研究成果を社会に還元する活動、市民参加型の

コンテンツ整備等を主なトピックとして、欧州における日本資料の専門家が集まる EAJRS での発表および聴講と、先進的取り組みを行っているルクセンブルク大公国の 2 機関での調査を行った。

5. 内容

The 35th EAJRS Conference (日本資料専門家欧州協会年次大会)

EAJRS は日本に関する情報・資料のヨーロッパでの流通促進を目的とする学会で、欧州各国の日本学研究者、日本資料を扱う図書館司書等が中心となって活動している。年次大会では例年、NII、NDL、人間文化研究機構等、日本の研究教育機関からの発表も多く行われている。

我々のグループでは、「京都大学・大阪大学・神戸大学のデジタルアーカイブにおける研究支援の取り組みと課題」と題して、各大学のデジタルアーカイブで公開しているリソースの紹介と、各大学の取り組みについて発表した。京都大学はコンテンツの二次利用促進、大阪大学は研究者との協働と研究データ公開支援、神戸大学は震災文庫による市民連携とシチズンサイエンス支援に重点を置いた。

発表後の質疑応答時や休憩時間には、欧州や北米の大学図書館で教員・学生の日本資料探索に対応している司書から多くのコメントをいただいた。各大学のコンテンツは海外からは探しにくい状況であること、デジタルアーカイブで公開しているコンテンツのジャパンサーチや ERDB-JP への登録を徹底すべきであること等、貴重な示唆を得た。また、発表の聴講により、各機関のデジタル資料公開における AI を応用した機能の開発や研究者によるデジタル画像データの研究活用事例について知ることができた。パネルディスカッション「日本学におけるデータとは？」では、人文学系研究者に研究データ管理の必要性をなかなか理解してもらえない苦勞など、日本と共通する課題の発表があった。

ルクセンブルク大公国での機関訪問

ルクセンブルク大公国では、ルクセンブルク大学の Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History (C²DH) (現代史・デジタル歴史センター) および Bibliothèque Nationale du Luxembourg (ルクセンブルク国立図書館) を訪問し、主にデジタルコンテンツの作成と公開について調査した。

・ Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History (C²DH) (現代史・デジタル歴史センター)

Christoph Brüll 准教授より、ご専門の WW2 戦時下における証言を集めたウェブアーカイブ、WW2.lu の説明を受けた。市民に研究成果を届けるための工夫として、テキストの分量やデザインに留意し、学校生徒の利用を意識して歴史語彙の解説コンテンツも付加しているとのことだった。新型コロナウイルスによる行動規制が行われた 2020 年に、世界に先駆

けて一般市民からの写真、動画やエッセイの投稿を募集しアーカイブ・公開した [covid19-memories](#) プロジェクトについては、リアルタイムの出来事を未来の歴史研究のために残すこと、さらにはどのような資料が集まってくるのかを観察することで、「リアルタイムの記録」と「後世の歴史記述」のギャップを知る手がかりを得ることを目的とした、研究と結びついたデジタルアーカイブであるという趣旨説明とともに、コロナ禍のもとアウトリーチに苦勞し、結局は大学に近い人々の投稿が多くなった、市民と研究者の間で記録すべきと考える情報の認識に相違があった、といった裏話も伺えた。

C²DH <https://www.uni.lu/c2dh-en/>

・ Bibliothèque nationale du Luxembourg (ルクセンブルク国立図書館)

ルクセンブルク国立図書館では情報・デジタルイノベーション部門の Ralph Marschall 氏より、同館の資料電子化と公開についてご説明いただいた。同館のコレクションは国立図書館としての歴史的資料収集事業にもとづくルクセンブルク・コレクション（禁帯出）と、通常図書（同館はルクセンブルク大学の大学図書館も兼ねている）からなり、前者についてデジタル化とデジタルアーカイブ eluxemburgensia.lu での公開を進めている。電子化プロセスにおいては、撮影画像の傾きを検知するツールを自館で開発するなど、データの質保証に努めており、AI を応用した OCR システムも開発している。また利用向けの工夫として、eluxemburgensia.lu は AI チャット機能を有しているが、多言語国家であるルクセンブルクらしく、ルクセンブルク語・仏・独・英の4言語での質問ができるとのことだった。

その後、利用者サービス部門の Vera Seitz 氏の案内により館内の見学を行った。2019年に新築移転した図書館で、書庫棟は閲覧棟とはコンクリートと空気の層で分断されて一定の温度を保ち、省エネルギーと資料保存を両立している等、建築の特徴についても説明を受けた。

BnL <https://bnl.public.lu/fr.html>

6. 所感

EAJRS で欧州の日本学研究者や、日本資料を必要とする研究者・学生にサービスしているライブラリアンからコメントを得たことは大きな収穫となった。普段、サービス対象として海外の利用者を意識することがあまりなかったが、先方には日本の歴史的情報を利用したいというニーズがあることを認識できた。また、日本から参加した各機関のデジタル部門担当者や研究者とも交流することができ、研究会への勧誘や参考になる情報を得た。

ルクセンブルクではデジタルアーカイブを作成・運営する研究者・図書館員から、コンセプトやデザインの意図、苦勞話や裏話を聞くことができた。これらは日本にいてウェブサイトを見るだけでは得ることのできない情報であり、直接コミュニケーションをとることの重要性を実感した。

日本の各大学にはそれぞれ貴重な資料コレクションが形成されている。これらを眠らせず、国内外に活発に利用され、新たな価値を生む資源にするために、今回の出張で得た知見や人の輪を活かし、デジタルアーカイブの充実化と発信を進めていきたいと思う。